

鎌倉交響樂團

第20回定期演奏會



11月25日(土) 7:00 p.m.

鎌倉市中央公民館

お祝いのことば

鎌倉市長 正木千冬

このたび、鎌倉交響楽団が第20回の記念演奏会を催すにあたり、一言お祝いを申し上げます。

鎌倉交響楽団は、音楽愛好の志が集い、結成以来10年の伝統を誇り、その間鎌響と呼ばれ、一般市民から大変親しまれてまいりました。

昔から、音楽は人々の生活とともに発達してきました。

文化の進んだ国ほど音楽も進歩しています。

よい音楽は非常に高い精神とすぐれた知恵が基礎となり生まれるものでありまして、音楽を盛んにすることは、りっぱな人間をつくるためにも、文化的で平和な社会をつくる上にも、まことに大切なことと考えています。

どうぞ鎌響のみなさん、ますます音楽を盛んにして、よい伝統を更に立派なものとするよう一層のご精進をお願いして、お祝いのことばといたします。



鎌倉交響楽団第20回定期演奏会

後援 鎌倉市教育委員会

鎌倉音楽クラブ

曲 目

1. 序曲 アウリスのイフゲニア：グルック

指揮 吉水 洋

2. チェロ協奏曲 ロ短調 Op.104：ドヴォルザーク

指揮 前田幸市郎

(V.C)独奏 前田幸康

第1楽章 アレグロ

第2楽章 アダージョ・マ・ノン・トロッポ

第3楽章 アレグロ・モデラート

—— 休 憩 ——

3. 交響曲 第40番ト短調 K.550：モーツァルト

指揮 前田幸市郎

第1楽章 アレグロ・モルト

第2楽章 アンダンテ

第3楽章 アレグレット

第4楽章 アレグロ・アッサイ

1972年11月25日(土) 7:00p.m.

鎌倉市中央公民館

チェリスト紹介

前田 幸康 さん

鎌倉市二階堂773-100

昭和20年 鎌倉に生れる。

チェロを、小沢 弘氏、黒沼俊夫氏、小野寺 純氏に師事。

芸大別科を経て国立音大を卒業。

趣味はスポーツ。特にテニス(硬式)は中学より楽しむ。

曲目解説

序曲 歌劇：アウリスのイフゲニア

グルックはウィーンで生れ、チェロの奏者としての腕をみがき上げ、後イタリーに行きオペラの作曲を学んだ。この作品は1774年パリーで初演され、異常なセンセーションをおこしたもので、この序曲は後にワグナーによってオーケストレーションされたものである。

チェロ協奏曲 ロ短調 作品104

「こんなすばらしいチェロ協奏曲が書けるのなら、わたしもとっくに書いているであろう。」この曲を聴いたブラームスは、こういつてほめたと伝えられています。たしかにこの分野では、ハイドン、ポツェリニの古典的協奏曲やビバルディのバロック協奏曲、そしてシューマンやサン・サーンスなどを群峰のように見下して、ひとり巨峰のようにそびえ立っています。ドヴォルザークはバイオリン協奏曲も書いていますが、これは次第に忘れられる傾向にあるように思われます。一方チェロ協奏曲の方は世界中の名チェリストが愛奏し、ステージにレコードに名演がくりひろげられ昨年は毎日音楽コンクールの課題曲にもなるなど、ますます人気を高めております。

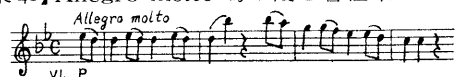
これは、アメリカ滞在中の1894年から翌年にかけて作曲されたもので、そのためか、管絃楽のパートには木管の美しいソロがちりばめられ、全合奏は劇的な迫力にみち、どこか『新世界』交響曲に似かよっています。チェロの独奏部の扱いは、ブラームスが感歎したように、まことにすばらしく、豊かに歌う旋律の妙味、オーケストラと一体になって協奏する有機性、管楽器のソロとの応答の心に沁みる美しさ、どの部分を聴いてもチェコの天才作曲家・ドヴォルザークの個性にあふれています。もしチャイコフスキーやブラームス、ベートーヴェンなどがチェロ協奏曲を書いていたとしても、この曲はその独自の美しさと力強さによって、魅力を失わず、いつまでも愛聴されるでしょう。

交響曲 No.40 ト短調 K.550

1788年、モーツァルトは僅か二ヶ月ほどの間に、彼の最大傑作として数えられる三つの交響曲を続けざまに書き上げた。それが39番の変ホ長調と、本日演奏されるト短調交響曲それから有名な「ジュピター」である。当時のモーツァルトは貧乏のどん底にあって、貴族社会の後援もなく、このような名曲を買い上げてくれる出版社もなく(おそらく気が付かなかったのだろう)、通俗的なメヌエット舞曲などを売って、細々と生計を立てている有様だった。

三曲それぞれ性格が違うが、この40番は甘い哀愁と典雅な美しさ、薄い巻雲の彼方に大宇宙の暗黒と神秘と永遠を垣間見るような情緒の深刻さをもった、とほろもない名作である。

【第一楽章】Allegro molto 鳴り渡る管絃楽のひびきは寸分のゆるみもなく進行して



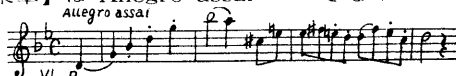
【第一主題】

聴く者の心を絶対的な美の無我境へといざなう。

【第二楽章】Andante は憧れに満ち、人声を模して開始され、反問するような第二主題は、疲れた魂の歌のように心に沁みる。

【第三楽章】Allegretto は特異な荒々しい性格のメヌエット主題ではじまり、中間部は無邪気な、どこかで平和に満ちた管と絃交互の歌うようなメロディーがあらわれる。このあたりの作曲者の手腕は単純で軽妙で、それでいて聴き手の胸にせまるすばらしい音楽をつくりあげている。

【第四楽章】は Allegro assai いきなり



【第一主題】

斬りつけるようなこの第一主題があらわれる。モーツァルトの音楽を「疾走する悲しみ」と評した人がいる。この終楽章には、そんな晩年のモーツァルトのいたましい不遇の心象風景が幻想的にあらわれている。古来天才的芸術家というもの、逆境におち入ればおち入るほど、進んで湧き出る幻想を追って、寝食をも忘れて創作に専念するものだが、二ヶ月ほどの間に三つの交響曲、それも先輩ハイドンを驚倒させるようなすぐれた作品を生み出したモーツァルトの頭脳と精神は、それにしても奇蹟的存在であろう。

